

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：82674

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13757

研究課題名（和文）都市における高齢者の被援助志向性および優れた高齢者支援の在り方に関する総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study on Help-Seeking of Older Adults and Effective Methods of Supporting Older Adults in Urban Areas

研究代表者

高橋 知也（Takahashi, Tomoya）

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）・社会参加とヘルシーエイジング研究チーム・研究員

研究者番号：90813098

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：都市部在住高齢者の被援助志向性について、アンケート調査およびインタビュー調査により検討した。

第1に、地域高齢者を必要な支援や活動に結び付けるための優れた事例として、千葉県松戸市で展開する「あんしん電話」地域見守り活動や東京都府中市におけるサポーター養成事業などに着目し、活動の中核を担う担当者へのインタビューを行うとともに、その内容分析をSCAT(Steps for Coding and Theorization)を用いて行った。第2に、「高齢者の援助拒否」の実態およびその関連要因を統計的に検討するため、東京都豊島区在住高齢者に対するアンケート調査を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大都市在住高齢者の日常生活における被援助志向性と基本属性、身体・心理・社会変数、あるいは具体的な支援ニーズとの間にある関係性に着目した研究は乏しく、援助拒否傾向の高い高齢者を必要な支援に結び付けるための方略を考える際の新たな視座を提供できた点に社会的意義があったと考えられる。また、高齢者の支援ニーズと支援者のニーズの両面から検討を試みた点で、学術的意義についてもある程度提示できたと考えられる。現在も得られたデータを基に量的・質的研究の論文投稿を進めており、引き続き成果発信を継続することでさらに研究のプレゼンスを高めたい。

研究成果の概要（英文）：In this study, I examined the help-seeking of older adults living in urban areas by means of questionnaires and interviews.

First, we focused on the "Anshin Phone" community watch-over activity developed in Matsudo City, Chiba Prefecture and community supporter training program in Fuchu City, Tokyo, as good practices of connecting older adults living in the community to support, and conducted a content analysis of interviews with five participants playing key roles in these activities by using SCAT(Steps for Coding and Theorization).

Second, we conducted a questionnaire survey of older residents in Toshima-ku, Tokyo, to examine the actual situation of "refusal of assistance," in which older adults refuse to provide assistance and services that are considered necessary for them.

研究分野：Social Gerontology

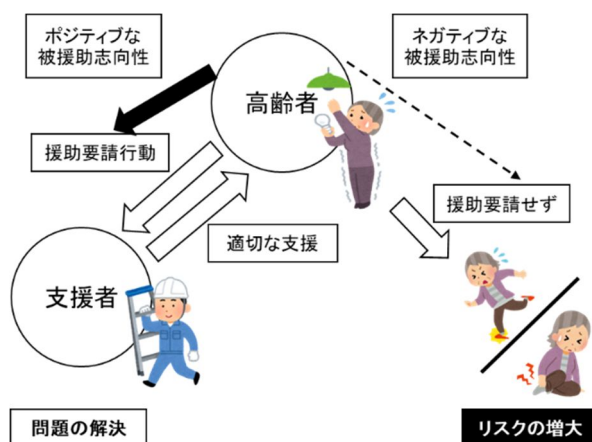
キーワード：被援助志向性 援助要請 高齢者

### 1. 研究開始当初の背景

昨今の高齢者の孤独死に関する報道等を契機として、「客観的にみて援助が必要な状態にある高齢者が周囲からの援助を拒否する」、いわゆる高齢者の援助拒否問題に対する注目が高まっている状況にあった。また、「調査対象としたケアマネージャーの **61.1%**が援助を拒否された経験を持つ」(小川他, **2009**) といった報告にもあるように、周囲からの援助を頑なに拒否するスタンスをとる高齢者が一定数存在するとの認識が、専門職者や民生委員などの支援者の間でも広がりをみせていた。このような背景のもとで、本研究は開始された。

### 2. 研究の目的

個人では解決の難しい問題に直面した際、周囲に援助を求めない、あるいは必要な援助を受け容れないことで日常生活における健康・経済面でのリスクをさらに増大させる懸念があるとの着想から、「『客観的にみて必要な支援』を受け容れない高齢者をいかに支援に繋げるか」という問いに正対することを目的とした。本研究により、高齢者の援助拒否に関する包括的理解および、支援を必要とする高齢者へアウトリーチする際の方略や接遇の在り方など、現場において有用な方略を提示できると考えた。



### 3. 研究の方法

研究目的を達成するため、以下の2つの取り組みを行った。第1に、地域在住高齢者支援の好事例に焦点を当て、高齢者を必要な支援に結び付けるために有効な取り組みに関する質的検討を行った。第2に、「客観的にみれば必要と考えられる援助やサービス」を当事者たる高齢者自らが拒否する、いわゆる高齢者の援助拒否に焦点を当てた量的・質的検討を行った。具体的には、都市部における高齢者支援に関する好事例の整理およびインタビュー調査と、都市在住高齢者へのアンケート調査を行った。

### 4. 研究成果

#### インタビュー調査

地域在住高齢者を必要な支援や活動に結び付けるための優れた事例として、千葉県松戸市で展開する「あんしん電話」地域見守り活動や東京都府中市におけるサポーター養成事業などに着目し、それぞれの活動の中核を担う担当者 **8** 名に対し、高齢者対応における接遇の工夫や必要なサポートへ繋ぐ際に意識している点、対応の難しさややりがいなどについてインタビューを行うとともに、その質的分析を行った。分析には **SCAT** を用い、インタビュー内容の一部に

については、**2022年12月**に出版した書籍「**PDCAを回す！地域を動かす！コミュニティサポートブック**」、発行：社会保険出版社）に掲載した。新型コロナウイルスの流行に伴い、一部インタビューの実施時期が**2023年度**に変更となったが、現在までに全てのインタビューデータのクリーニングを完了している。



### アンケート調査

東京都豊島区に住む**65歳以上**の男女**15,000**名を無作為抽出し、令和**3年9~10月**に質問紙調査を実施した。分析対象は、回答者のうち個人情報提供に同意した**5,576**名(平均年齢**75.6**歳、**SD:7.0**、有効回収率:**37.2%**)とした。調査項目は、短縮版被援助志向性尺度(高橋、**2019**)【**2**因子(援助欲求・援助抵抗感)各**5**件法**3**項目、得点が高いほど傾向が強い】および、これらとの関連が予測される基本属性(性別、年齢、学歴、暮らし向き、就業、居住形態)、心身の健康(主観的健康観、物忘れ自覚、精神的健康度)、社会関係(外出頻度、孤立に対する感受性、社会的孤立、地域信頼感、ソーシャルサポート授受)などとした。分析には援助欲求、援助抵抗感を従属変数、その他の変数を独立変数とする重回帰分析を用いた。本研究の実施に際しては、筆頭演者の所属機関が設置する倫理委員会の審査・承認を受けて実施した。

重回帰分析の結果、援助欲求の高さと性別(女性)、生活が苦しいこと、主観的健康観の低さ、物忘れの自覚があること、外出頻度の低さ、孤立に対する感受性の高さ、地域信頼感の高さ、ソーシャルサポートの豊かさとの間に、また援助抵抗感の高さと年齢の高さ、学歴の低さ、生活が苦しいこと、精神的健康度の低さ、孤立に対する感受性の高さ、周囲からの孤立、地域信頼感の低さ、ソーシャルサポートの乏しさとの間に、それぞれ有意な関連(いずれも  $p < .05$ )がみられた。

結果から、生活の苦しさや心身の健康不調といった生活上の問題の悪化と、援助欲求および援助抵抗感の両方の高まりとの間に関連が示唆された。これは援助欲求と援助抵抗感の両方が高い、いわば葛藤状態にある高齢者が存在することを示唆した先行研究(高橋、**2019**)を支持する結果であるといえる。また周囲からのソーシャルサポートの授受や近隣との関係が豊かであることが援助欲求の高まりに関連すること、逆にこれらが乏しいことが援助抵抗感の高まりを助長する可能性が示唆された。他方、居住形態や就業などとの間に有意な関連はみられなかった。

大都市在住高齢者の日常生活における被援助志向性と基本属性、身体・心理・社会変数、あるいは具体的な支援ニーズとの間にある関係性に着目した研究は乏しく、援助拒否傾向の高い高齢者を必要な支援に結び付けるための方略を考える際の新たな視座を提供できた点に社会的意義があったと考えられる。また、本研究に置いて受援者として想定する高齢者の支援ニーズと支援者側の接遇や考え方、抱えている問題との両面から検討を試みた点で、学術的意義についてもある程度提示できたと考えられる。現在も得られたデータを基に量的・質的研究の論文投稿を進めており、引き続き成果発信を継続することでさらに研究のプレゼンスを高めたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高橋知也, 横山友里, 清野諭, 野中久美子, 森裕樹, 山下真里, 藤原佳典
2. 発表標題 都市在住高齢者における被援助志向性に関連する身体, 心理および社会的要因
3. 学会等名 日本公衆衛生学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松永博子, 高橋知也, 鈴木宏幸, 藤原佳典
2. 発表標題 生活困窮者自立支援の取組と課題及びニーズに関する研究：都内特別区の路上生活者対策施設を対象として
3. 学会等名 日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高橋知也, 野中久美子, 倉岡正高, 村山幸子, 根本裕太, 松永博子, 村山陽, 小林江里香, 藤原佳典
2. 発表標題 地域在住の若・中年および高齢者の持つ被援助志向性の様態と関連要因
3. 学会等名 日本老年社会科学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋知也, 相良友哉, 西中川まき, 藤原佳典
2. 発表標題 高齢者における援助要請スタイルとの関連要因の検討
3. 学会等名 日本老年社会科学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松永博子, 高橋知也, 相良友哉, 藤田幸司, 藤原佳典
2. 発表標題 生活困窮者自立支援施設における支援プロセスに関する研究
3. 学会等名 日本公衆衛生学会大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 藤原 佳典（編著）／鈴木 宏幸（編著）／高橋 知也（編著）／東京都健康長寿医療センター研究所社会参加と地域保健研究チーム（監修）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 社会保険出版社	5. 総ページ数 112
3. 書名 PDCAを回す！地域を動かす！コミュニティサポートブック 地域共生社会実現のために	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------